

琉球大学学術リポジトリ

「出産祝いの歌」に見る生命観

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅井, 玲子, Asai, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1527

「出産祝いの歌」に見る生命観

Philosophy regarding life seen in "a song for a celebration of a birth"

浅井 玲子

1 はじめに

人間は、いつの時代でも、一定の文化を持つ家族の中に生まれてくる。その命は、どのように家族や地域社会に受け入れられ認知されてきたのだろうか。

時代は変わり、様々な物や事が早く便利になっても、人間はそんなにたやすく変わるものではない。人間が誕生、成長する基本的プロセスは変わらないし、文化を受容し、継承し、発展させる役割も変わっていない。また、大人の世界に果たす子どもの役割の大きさも変わっていない。

先進国における自殺の増加や生殖技術の進展に伴う倫理的問題や母親の育児不安、虐待、子ども同士のいじめ、引きこもり等が問題になり、医学の進歩や科学技術の進歩が必ずしも子どもたちの幸せに結びついてきていない事を感じている。それらの事と並行して命の重さや尊さを伝えることは大人としての我々に科されている役割ではないだろうか。

地域文化が見直され、再評価され、沖縄文化への注目度もますます高くなってきた。衣食住、祭祀、芸能における研究の進展にはすばらしいものがあるが、生命観を次世代教育や伝承の視点から捉える事は少ない。

本稿は多くの者が文字を持たなかった時代の、社会的合意として口承されてきた琉歌、その中でも「出産を祝う歌」に着目しその中から人々の生命観を読み取る試みである。

琉歌は、もともとウタと呼ばれていたが、大和の和歌が入ってきたために、琉球の歌を区別して「琉歌」と呼ばれるようになった、8・8・8・6の4句でまとめた短歌形式の歌である。サンシンの伝来によって、より盛んに歌われるようになっ

たといわれている。その多くは読み人知らずであるが、多くの人に好まれ、社会的合意を得たもののみが伝承されてきたという意味で非常に貴重であると考えられている。

ところで、現在の沖縄における出産を含む祝賀の座開きはほとんど「かぎやで風」節になっている。しかし、「かぎやで風」は「恩納節」「中城はんた節」「特牛節」「長伊平屋節」と共に、五曲を「御前風」と呼び琉球国王の御前で最初に演奏されたとするのが通説である。多くの者が出産祝いに「かぎやで風」のみを歌っていたとは考えにくい。このことは、出産祝いの歌が伊計島では「御前風の節で歌われる（後述詳細『沖縄民俗』5号29ページ）」や、浜比嘉島では「祝いのはじめにこの歌を御前風の曲で3回くり返してから酒宴（『沖縄民俗』5号64ページ）」からも推察される。つまり「かぎやで風」は曲のみを利用する場合もあったと推測できよう。

1974年（本土復帰1972年）、沖縄県は民俗資料の保護に資するため、緊急調査を行った。全島について19の項目について調査し、資料をまとめている¹⁾が、一生の儀礼や穢れの項目には、お産についての記述はあるが、「出産祝いの歌」については記述がない。また、『南島歌謡大成Ⅱ沖縄編下』²⁾には、六冊の文献から採取した歌が納められているが、「出産祝いの歌」は収録されていない。

恩賜財団母子愛育会編『日本産育習俗資料集成』³⁾は妊娠及出産に関するもの15項目、育児に関するもの10項目について沖縄を含めて全国調査をしているが、出産祝いの歌に関する調査記述はない。その他、多くの文献にあたったが、後述の2種13冊しか資料が得られなかった。

本稿では主として出産祝いを通してかいま見える沖縄の生命観に関するキーワードを取り出すこ

とを試みた。単純に一般化することはできないが、次世代に伝えたい生命観について考察し、家庭科教育における保育教育教材開発のための基礎的研究と位置付ける。

2 方法

2-1 文献調査

本研究では、文献調査を主方法とし、意識においては、聞き取り調査を行った。

掲載があったのは、以下の13冊であった。これらから「出産祝いのうた」を抽出し、そのすべてを研究の対象とした。

- 1) 『沖縄県史23 民俗2』⁴⁾ 沖縄県教育委員会、1973年、図書刊行会、420ページ～422ページ
- 2) 『沖縄民俗』⁵⁾ 琉球大学民俗研究クラブ、1960年～1976年、出産祝いの歌が載っているのは、3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 13, 14, 16, 17号の12冊である。

尚、『沖縄県史』の筆者である宜保によれば、「これまでの文献には意外と民俗行事の中で歌われた歌を記載した物が少ない。(略)琉球大学の民俗クラブによってこれまで出版された20余号にわたる『沖縄民俗』の口承文芸の項にまとめられている歌謡はその内容といい、ねらいといい最高のものであり、これまでのこの方面における貧弱な調査の大きな支えになるものであり、賞賛を惜しまない。以下に記載する歌謡の大部分は『沖縄民俗』の「口承文芸」によって収集されたものを転記した。」としており、『沖縄民俗』は一大学のクラブ誌というより、貴重な記録として信頼性が高いと認識できる。

2-2 「出産祝いの歌」

歌の分類については文献によって異なる。また、出産には「産婦に対する祝」と「生児に対する祝」があらう。しかし、これはどちらか一方のみが成立することはないと考え、ここでは「子供の誕生について祝う気持ちを歌った歌」というゆるいくくりとした。「出産祝いの歌」として代表させたのは、『沖縄県史』の分類に統一したためである。そこで『沖縄民俗』の分類につ

いては、表中の「注及び沖縄民俗の項目」に示した。

2-3 読みと意識

対象とした歌すべての読みと意識を試みた。これらの歌が聞き取られた時代には、多くの者が見れば読め、読めば意味が分かる状況であったと思われる。しかし現在では、多くの者がその読みも意味も知らないのが現状である。

沖縄の方言使用への弾圧は有名な事実である。筆者自身の経験でも「方言を使う者が多い」事が学校の問題として取り上げられていた記憶がある。それは逆に、まだ方言の使用が多かったことを意味するが、そのように禁止された者の子どもたちの世代となった。多くの口承は寸断された。読めない、使えない者の方が多数となった。

今現在の沖縄の部分的な方言使用は、文化の中核をなす自分達の言葉を否定されたことに対するゆり戻しのひとつと捉えることもできよう。そこで、若い世代が鑑賞し、活用し、考えていくためには、読みや訳文をつける必要があると考えた。

尚、意識部分では、多くの方のご協力をいただいた。

3 結果と考察

結果の一覧は表の通りである。尚、便宜上、歌には任意の番号を付した。

1～24は『沖縄県史』『沖縄民俗』両方にあげられているもの、25～27は『沖縄県史』のみ、28～42は『沖縄民俗』のみに掲載されているものである。尚、39と40、42は採取者によって訳がついていたため、そのまま提示した。また、ほぼ同じ歌も見られたが、聞き取り地が違うため、今後の資料的価値を考え、全部を一覧とした。文献から引用した部分は太字とし、筆者の記述部分とは区別した。

浅井玲子：「出産祝いの歌」に見る生命観

	沖縄県史	沖縄民俗	読み	意味	注及び「沖縄民族」の項目	
伊平屋村字島尻	1	夜間みちん悟て 玉賃金しだち 今日や母親の 御祝さびら	夜間みちん悟て 玉賃金しだち 今日母親の 御祝さびら	ユヤミチンサトゥティ タマクガニシダチ チュウヤハハウヤヌ ウコエサピラ	夜間の満ちたのを悟って 愛しい我が子を抱き 今日は母親の 御祝いをしましょう	「出産祝いの歌」 グワンス…元祖、先祖
	2	我身しんたてて 親の名も上げて ぐわんす光らする 玉の御産子	ワガミシンタティティ ウヤヌナンアギティ グワンスヒカラスル タモノウミンガ	我が身をしゃんとし 親の名もあげ 先祖を照らす 玉のような赤ちゃん（お嬢様）		
	3	夜間みちん悟て 玉賃金しだち 今やくまうとて 母親の御祝	夜間みち悟て 玉賃金しだち 今日やくまうとて 母親の御祝	ユヤミチンサトゥティ タマクガニシダチ ナマ（チュウ）ヤクマウトティ ハハウヤヌウコエ	夜間の満ちたのを悟って 愛しい我が子を抱き 今（今日）はここで 母親の御祝い（を）	
		<民俗2 421ページ>	<4号 24ページ>			
	4	夜間みち出でて 明さ御世祥で 玉賃金かみて 母の御祝	同左	ユヤミチンジティ アカサミユウガディ タマクガニカミティ ハハヌウコエ	夜間から満ち出で 明るい御世を拝み 玉賃金を（頭上に）いただき 母親のお祝いを	
	5	昨日なちやるぼうじゃが 七ちくるなりば 銭倉の下に 乗い馬立てて	昨日なちやるぼうじゃが 七ちくるなりば 銭倉の下に 乗い馬立てて	チヌナチャルボウジャガ ナナチグルナリバ ジングラヌシチャニ ヌイウマタティティ	昨日生んだ赤ちゃんが 七つ頃になれば 銭倉の下に 馬を立てて（繁ぎ）	
	<民俗2 421ページ>	<4号 24ページ>				
与那城村伊計島	6	夜間わち出で 明さ御世祥で 母の命すくて 産子御祝	夜間わち出で 明さ御世うがで 母の命すくて 産子御祝	ユヤミワチンジティ アカサミユウガディ ハハヌヌススクティ ウミンガウコエ	夜間から湧き出で 明るい御世を拝み 母の命を救って（た） 赤ん坊のお祝いを	「マンサン祝い」 ・御前風の節で唄われた（5号29ページ）との記述がある。 ・マンサン…生後5日または7日頃に行う小宴（マシ）親戚や隣近所の人が集まり祝った。産の忌の意味であった。
	7	ゆかる日に出で 生りたる赤子 若松の如 むてい栄い	ゆかる日に出で 生りたる赤子 若松の如し むてい栄い	ユカルヒニンジティ ウマリタルアカングァ ワカマチヌグトウ ムテイサカイ	佳き日に（この世に）出で 生まれた赤ちゃん 若松のように 生い茂る（ように）	
	<同 上>	<5号 29～30ページ>				
渡名喜島	8	くるきざいばいぬ 鳴い音ぬしぎさ 昨産ちやる功主ぬ ゆとぎさらめ	クルキザイバイヌ ナイウトヌシギサ ユビナチャルボージャーヌ ユトギサラミ	クルキザイバイヌ ナイウトウヌシギサ ユビナチャルボウジャヌ ユトウギサラメ	黒木で作った（サンシンの） 鳴る音が賑やかだ 昨夜生んだ子の ユートジをしましょう	「マンサン祝い」 ・サバ…蛇皮歌 ・シバ…繁さ ・ユト…夜如。産前産後知人の婦人が産婦の世話をし、男たちは酒や三味線で夜を明かした。子供を産物から守るために行われた。（地域によって多少異なる） ・チヤラヌメ、ウジラーヌ、地名、人名？ ・ジンコーヌ…沈香あるいは銀行前の主？
	9	ちやらぬめー うじらーじーぬ じんこーぬーすーが めーまいるなー玉賃金	チャラヌメー ウジラージーヌ ジンコーメースーガ メーヌイルナータマクガニ	チャラヌメー ウジラージーヌ ジンコーメースーガ メーマイルナータマクガニ	<未詳>	
	<民俗2 421ページ>	<11号 32ページ>				

歌 谷 村 座 喜 味	10	しちくさんうち あみたまくがさて 育て美ら羽の 生ゆる美らさ	シチグサンウチヌ アマタマグカザティ スダティチュラバニヌ ミユルチュラサ	シチグサンウチニ アマタマグカザティ スダティチュラバニヌ ミユルチュラサ	七・五・三の間に 綱玉具を飾って 育てた美しい羽が 生えたように美しい	「出産唄」 ・七五三 →ビジャ付のことか？ ・かか 七五三のビジャ綱に豚の血を 塗ったり、骨を下げたりし てそれを村の出入りに 張っておくと人間や家畜の 疫病を防ぐことができると いう。 (11号 76ページ)
	11	なつ 願さわき出でて 明さぬ世拜み 玉黄金しきて 母の祝 〈同上〉	クラサワキンジティ アカサヌユウガミ タマクガニシキティ 母ヌユエー 〈11号 69ページ〉	クラサワキンジティ アカサヌユウガミ タマクガニシキティ ハハヌユウエ	暗いところから湧き出で 明るい世を拜み 玉黄金を供えて 母親のお祝いを	
	12	明さ御世様で 夜間湧き出で 玉黄金しりて 母の御祝	明さ御世おがで 夜間湧き出で 玉黄金しりて 母の御祝	アカサミユウガミ ユヤミワキンジティ タマクガニシリティ ハハヌユウエ	明るい御世を拜み 夜間から湧き出で 玉黄金(赤ん坊)が生まれ 母親のお祝いを	「祝唄」の誕生 ・シヤイ→軽化する
	13	よ 昨夜生ちやる坊主小 七ちくるならば 下駄さばくまち 乗馬乗しら	タベ生ちやる坊主小 七つ頃ならば 足駄さばくまち 乗馬乗しら	ユビナチャルボウジャグア ナナチグルナラバ ゲタサバクマチ ヌイウマヌシラ	昨夜生まれた赤ちゃん ？つくらいになれば 下駄やぞうりをはかせ 馬に乗せ(ましょう)	・さば…草履
	14	くまの二所や 果報な人どやゆる 銭まるち躍あて 孫前ち 〈民俗2 421ページ〉	此々の二此や 果報な人どやゆら 銭まるちくさて うまが(孫)前ち	クマヌタトウクルヤ カフナチユドヤユル ジンマルチクサーティ ウマガメーナチ	此処の2ヶ所(軒)は 果報な人ですよ お金は腰にしまい 孫を前にして	
	15	くまに寄りゆし ただ由やあいびらぬ くまの二所の 御祝やてど	此々に寄りゆし たゞただ由やあいびらぬ 此々の二処の 御祝やてど	クマヌリユシ(ヤ) タグユイヤアイビラン クマヌタトウクルヌ ウユエヤティド	此処に集まったのは 理由があつての事です 此処の2ヶ所(軒)の お祝いだからですよ	
16	白髪お年寄や 床の前に飾て 生子歌しみて 孫舞方	白髪お年寄や 床の前に飾て 生子歌しめて うまが空舞	シラガウトウスイヤ トウクヌメニカザティ ナシガウタシミティ ウマガメエカタ	白髪のお年寄りは 床の間に飾って 子供に歌を歌わせ 孫が舞う	16と17は「祝唄」の中の 新築の歌である。沖縄県史と の分類に違いが見られる。	
17	うすくがじまるや 石抱ちもてる 孫抱ちむてる くまの殿内 〈民俗2 422ページ〉	うすく 樹や 石抱ちもてる うまが抱ちむてる 此々の殿内 〈7号 52ページ〉	ウスクガジュマルヤ インダチルムテル ウマガダチムテル クマヌドウンチ	ウスクヤガジュマルの木は 石を抱いて栄える 孫を抱いて栄える ここの御邸	ドゥチ…総地頭家の事、ある いはその屋敷 ウカ…あここの木	
与 那 城 村 字 宮 城	18	夜間から出でて 明や昼拜で 玉黄金教て 親の御祝い	ユヤミカラ ンディティ アカヤヒル ウガティ タマクガニ スクティ ウヤヌ ウユエー	ユヤミカランジティ アカヤヒルウガティ タマクガニスクティ ウヤヌウユエ	おなかの中から出て 朝日をおがみ 玉黄金をとって 親(母)のお祝い 〈17号 55ページ〉	「出産祝いの唄」 夜間を「おなか」と記して いるのは疑問である。

浅井玲子：「出産祝いの歌」に見る生命観

与那城村	19	かんかりく給れ 産しむぬ子果報や かんでうみみや うしわでむぬ	カンカリク タボレ ナシムヌクア カフーヤ カンテイ ウミミヤ ウシーワデームヌ	カンカリクタモレ ナシングアカフウヤ カンテウミミヤ ウシワデムヌ	<未詳> 子供をさずかった幸せは <未詳> お世話だから	・か…かに(欺く、かように)の口語
	20	昨夜産ちえる坊主小 七つ頃なりば 男やいね 乗い馬たてり 女やいね 乗り頼たてり	ユビナチェール ボージャーグ ナナチグルナラバ イキガヤイネー ヌイウマタテリ キナグヤイネー ヌイクラ タテイリ	ユビナチェールボウジャグ ナナチグルナリバ イキガヤイネ ヌイウマタテリ イナグヤイネー ヌイクラ タテイリ	昨夜生まれた赤ちゃん 七つくらいになれば 男だったら 馬を立て 女だったら 鞍をたてなさい	・首里土族の用語としては「坊主」は「坊や」 ²¹ であった。しかし、後段部分を見ると単に赤ちゃんの意味と解することができる。
	21	つちくさんまるぬ まちうてるたまご うしてくらばにぬ みりば美さ <民俗2 422 ページ>	ツチグサンマルヌ マチウテルタマゴ ウシテグラパニヌ ミリバチュラサ <17号 55ページ>	ツチグサンマルヌ マチウテルタマゴ ウシテグラパニヌ ミリバチュラサ	産み落とした卵 見れば美しい	「出産祝いの歌」 ・「77」…通常「が」という方が用いられる。 ・「が」が「こ」に「が」が変化、北部方言・「が」…生えればとも訳できる。
	22	暗しみ世すたち 明さ御世拜で 母が命救て ぼうじゃが御祝	くらしみ世すたち 明さ御世拜で 母が命救て 赤子(ぼうじゃ)が御祝	クラシミュスタチ アカサミュウガディ ハハガヌチスクティ ボウジャガウユエ	暗い世を果立ち 明るい御世を拝み 母の命を救って 赤ん坊のお祝いを	「ナジキ」 ・「ナジキ」…命名のこと名が決まると火の神に報告する。
	23	男みがなしは 苗里がなしめでい 女みがなしは ちみ(君)がみてい	男みが生しわ 苗里加那(メノリ)めでい 女みが生しわ ちみ(君)がみてい	イキガミガナシハ スナガナシメディ イナグミガナシハ チミガミディ	男の子なら 玉様に仕え 女の子なら 大君に仕え	・「か」…恋するひと、ひとしい人、愛し、加那志と表記する。
安名城村	24	此処ぬ二所や 果報な人いめい 銭まるちくさい 産子め一なち <民俗2 422 ページ>	比ぬ二所や 果報な人いめい 銭まるちくさい 産子(うみくわ)め一なち <8号 45ページ>	クマヌタトックルヤ カフウナチユイメイ ジンマルチクサイ ウミンガメーナチ	此処の2ヶ所には 果報な人がいらっしやる お金をたんとため 赤ん坊を前にして	
	25	ゆやみ(夜間)わき出ちて 明さ御世拜で 玉貫金救て 二人が御祝		ユヤミワキンジティ アカサミュウガディ タマクガニスクティ タイガウユエ	夜間から湧き出で 明るい御世を拝み 玉貫金すくって 二人の御祝い	
	26	よび(昨夜)産ちやる坊主(坊主) 七つ頃なれば わが家の側なかい (男)乗い馬たてら (女)倉たてら		ユビナチェールボウジャー ナナチグルナリバ ワガヤヌスバナカイ ヌイウマタテラ クラタテラ	昨夜生んだ赤ん坊が 七つ頃になれば 我が家の側に 馬を立て(繋ぎ) 倉を建て	
	27	天孫よかみて 生れたる産子 元祖光らしよ 後世までも <民俗2 422 ページ>		ティントックユカミティ ウマリタルナシング グァンスヒカラシヨ ヌチヌユマディン	天孫を授かり 生まれた我が子 先祖を光らせよ 後の世までも	

津 堅 島	28	ゆやんみちさとて あかさみゆうがで 親と子ゆ中に ぐすじさびら (3号 34ページ)	ユヤンミチサトウティ アカサミユウガティ ウヤトクヌナカニ グスジサビラ	夜闇が満ちたのを悟って 明るさを拝み 親と子の中の お祝いをしましょう		
	浜 比 嘉 島	29	夜闇湧ち出て 明さ御世拜で 玉黄金抱て 母の御祝	ユヤミワチンジティ アカサミユウガティ タマクガニダキテ ハハヌウユエ	世間から湧き出で 明るい御世を拝み 愛しい我が子を抱いて 母親のお祝いを	「ウチ」祝い 産前祝 ウチキとは産の儀の事。 産名の選定をした日で親戚 縁者で祝う。夜は、裏庭で 夫と一つの茶碗にウチキを 入れて食べた。
		30	昨日産ちえる赤子 七才頃なれば アサギ倉造て 乗馬立てら	チヌナチエルアカンガ ナナチグルナリバ アサギクラツクティ ヌイウマタティラ	昨日生んだ赤ん坊が 七つ頃なれば 離れに倉を建て 馬を立(繋ぎ)ましょう	七五三儀 出産が出づくとガ(産室)をヒヤ イ(七・五・三)で繋りめぐらし 裏庭と表庭の入り口には倉裏神を 祀り、その中央に卵1個をぶら下 げる。それらは産物の進入を防ぐ ためであり、卵は出産の無事を計 の卵の孵化にたとえたのであ らう。
31		七五三綱ヌ 網内ヌ卵 ヤガテイ食羽ヌ芽 ユラトウミバ	シチグサンナワヌ アミウチヌクーガ ヤガテクラハヌメ ユラトウミバ	ヒチヤイナ(七・五・三)の 網の中の卵 (未詳)	「マンウ祝」 5,6日目に親戚縁者を招待して お祝いする。その日に産室の 出入り口にかけてあった綱と 卵をはずす。出産の中でのウ チ祝(産名)に歌う。	
東 村 平 良 区	32	夜闇湧ち出て 明さ御世拜で 玉黄金抱ち 母の御祝 (6号 26ページ)	ユヤミワチンジティ アカサミユウガティ タマクガニダチ ハハヌウユエ	世間から湧き出で 明るい御世を拝み 愛しい我が子を抱いて 母親のお祝いを	(5号 64ページ)	
	伊 是 名 村	33	夜闇湧ち出て 明さ御世拜で 玉黄金抱て 母ヌ御祝	ユヤミワチンジティ アカサミユウガティ タマクガニダキテ ハハヌウユエ	世間から湧き出で 明るい御世を拝み 愛しい我が子を抱いて 母親のお祝いを	「ナジキ」
34		昨夜産ちえる赤子が 七才頃なれば アサギ倉建てて 乗馬立てら (8号 23ページ)	チヌナチエルアカンガ ナナチグルナリバ アサギクラツクティ ヌイウマタティラ	昨夜生んだ赤ん坊が 七つ頃なれば 離れに倉を建て 馬を立(繋ぎ)ましょう		
古 宇 利 島	35	ゆかる日はいなり ウマリタルボージャー はグアン光らす 玉のボージャー	ユカルヒハイナリ ウマリタルボウジャー ハグアンヒカラス タモノボウジャー	今日の良い日に 生まれた赤ちゃん 先祖を光らす(照らす) 玉のような赤ちゃん	生まれた日、何もかも終 わってから、勝手婆さんが 赤子を抱き歌を歌う。 マンウ祝いには「御前風」が歌 われる。(8号67ページ)	
	36	クラシミカラジテ ウブガー (未詳) (8号 66ページ)	クラシミカランジティ ウブガー	暗い場所から出で 産川		

浅井玲子：「出産祝いの歌」に見る生命観

糸 満 市 喜 屋 武	37	やはんから ^い 出てい 明るさを ^い 輝いでい 勝る日やとみてい 弓子引ちゆい	ヤハンカライジティ アカルサヤウガディ マサルヒヤトウミティ ユミックアヒチュイ	夜半から出て 明るさを ^い 輝み めでたい日なので (^い ジ ^い ヲ)に)弓を射る	「出産唄」 ・ ^い ジ ^い ヲ...赤子に名前が つき、人間としてスタート する日。魔物に見立てたミ ジューを弓で射り弓と矢は 魔よけとして家の軒に差し ておく。村で共有し赤子が 生まれる度に紐を結びその 年に生まれた子供の数を示 す。	
	38	呼び度ちやるぼうじゃ小 七才 ^{ナナ} 頃 ^ノ なりば 親 ^{オヤ} め ^メ 顔 ^ガ なかい 乗り ^ノ 馬 ^{ウマ} たててい < 10号、175ページ >	ユビナチャルボウジャガ ナナチクルナリバ ウヤヌスバナカイ ヌインマタティティ	呼び生んだ赤ん坊が 七つ頃なれば 親の顔に 馬を立(繁ぎ)ましょう		
	39	kurasa watiiziti Akasani ugadi Tamakugani Sukuti Iiwawa ga uyue < 12号、117ページ >	クラサワキンジィティ アカサヌウガミ タマクガニスクティ ハハヌユウエ	暗いところを割って出て 明かるい所を ^い 輝み 玉貨金を ^い 輝 ^い つて 母親のお祝いを		「生産の歌」
	40	ユーミワチンヂティ アカサミユウガディ タマクガニスクティ カーミヌアングコーイ < 13号、92ページ >		夜闇から湧き出で 明るい御世を ^い 輝み 玉貨金をすくって 菓の油を買ってきましょう		「出産祝の歌」
久 米 島 中 里 村	41	クラサワチンヂティ アカサミユウガディ タマクガニスクティ ハハヌユウエ < 14号、55ページ >		闇の中から湧き出で 明るい御世を ^い 輝み 玉貨金をすくって 母のお祝い	「出産祝の歌」	
糸 満 町 兼 城	42	ウスクガジュマル イシガチニムテユン ウミグアダチムテル クマノトンチ < 16号、97ページ >		ウスクヤガジュマルの木は 石垣に ^い 輝る 赤子を抱いて榮える このお家	「出産祝の唄」	

特徴的と思われる事柄について考察する。

1) クラサワキンジィティ (暗い所から湧き出で)

六首の歌に「クラサワキンジィティ」の表現が見られる。

また、夜闇、暗しみ夜等「暗さ」や「暗い場所」の表現を入れると十六首に見られる表現である。その暗き所から湧き出るとい表現を18の歌では「おなかの中から出て」と訳しているが、果たしてそうであろうか。

「暗い所から湧き出た命」にはもっと大きな意味と広がりを感じるのである。逆にワタ (おなか) という言葉は一切出てこない。

では、命の湧き出る暗い所とはどこを指すのであろうか。

沖縄では、現在でも、生まれたばかりの赤ん坊に対して、オジーウマリカーイ (祖父の生まれ変わり)、オバーウマリカーイ (祖母の生まれ変わり) という表現をよく耳にする。「出産後命名の日まで、祖父母の名をつけるのが一般的だったが、たんにフトウキーグワー (仏小) と称する所もあった」⁶⁾ という。生児を祖父母の生命の再生したものとこの基本的な考え方は、今尚生きている。

また、沖縄の墓の形については、様々なところで述べられている。「亀甲墓の形は、女性がひざ頭を立てて、あおむけに寝ている姿勢だという。人

間は母体から生まれ、死ぬと元の処へ帰るのだという⁷⁾あるいは、「墓は亀の甲羅に似ていることから亀甲墓ともいわれますが、女性の子宮をかたどっているといえます。一軒の家で一年に二回人が死ぬと墓をあけません。墓をあけることは子宮の原理にそむくから」⁸⁾だという。

大城は「オモロに「てだがあな」という言葉があり、これについては古代人が太陽は東方にある穴から出てくると信じたのだと説明されているがこれはあるいは、女陰から人間が生まれてくることのイメージと関連して考えられたのではあるまいか。月は女性の生理のリズムと呼応し、人間の生成と密接な関係を持つ。」⁹⁾仮説として述べているが、「クラサワキンジィティ」の後に続く「アカサミウウガディ(明るい御世を拝み)」と考え合わせると、説得力をもつ。

湧き出る命という言葉には、あの世とこの世の近い島であることを改めて実感させられる。

2) ユビ(昨夜と呼び)

口承文芸の宿命として聞き取った者が後から文字を当てるため、同じ音に複数の言葉が当てられることがある。

8、13、20、34ではユビを昨夜(ユウビ)の語調を整えてユビとしたと考えこの字を当てたのであろう。しかし38は呼び(ユビ)の文字を当てている。前段の暗闇を受けて暗い→夜としたことも考えられる。なぜなら、昨日を表す言葉は「チヌ」であり、5、3にはその表現が見られる。つまり、チヌとユビは使い分けられているように思えるからである。

一方、「呼び」については「呼び寄せ生んだ」の意と解釈できよう。どちらであるかについての結論よりも、2つの意味を持って使われていたのではないかと考える。

あの世あるいはもう一つの暗い世界から呼び寄せた命と解釈したい。

3) タマクガニ

十四首に「タマクガニ(玉黄金)」の表現が見られる。

シダチ、スクッテ、カミテ、シリテ、シキテと続く言葉も様々である。

本稿では玉黄金は、宝石や黄金のように大切な人や物、かけがえのない我が子あるいは愛しい我が子と解釈した。

これは、辞典や文献などの他例においても多く用いられているため、前例に習った。

「子に勝る宝なし(宝くごども)」ではなく「宝=ごども」と直接的な表現となっているのは興味深い。

4) ナナチグルナリバ(七つ頃になれば)

日本全国に七つまでは神の内思想は見られ、「沖繩でも、7歳あるいは6歳までの子どもを葬ったいわゆるワラビ墓が存する村は少なくなかったし、また、7歳以下の子供はがんには乗せないとする風習も一般的であった。がんとは、その中に死者を入れて4人ほどで担いで墓まで運ぶ葬具である。」¹⁰⁾

また、「幼児を外出させる時に「アンマークトウ(母の事は)、ターガン(誰がも)、ンーダン(見ない)、アンマーチュイシドゥ(母さん1人だけが)、ンージュル(見るんだ)」¹¹⁾という呪文を唱える習俗は今でも生きている。沖縄県具志川市においても「アンマークトウ、ターガン、ンーダン」までに省略され、60代以上の方が主として使っている。(筆者聞き取り)子どもが悪霊などを見てしまい、マブイ(魂)を落とさないようにとのまじないである。

また、幼い子の外出時にはサンを結んでそっと忍ばせておくことも、魔よけとして行われている。

7歳になり、特別な存在から現実世界の人間になる日を待ち望み歌に詠んだのであろう。

5) ハハヌヌチスクティ(母の命をすくって)

出産は母親にとって、命がけの作業であった。母親も子ども無事であったとき、子どもは、母親の命を救ったとして称えられている。現在でも出産は胎児との共同作業だといわれるが、医療の発達しない時代の出産の過酷さを垣間見ることができ。現在でも沖縄の乳児死亡率や新生児死亡、周産期死亡率は全国的に見て高い。同じ次元で語ることは出来ないが、2人が無事である事への喜びの表現であり、もしも母に何かあっても、次の命として生き続けるとの含みもあったかもしれない。

6) グワンスヒカラシヨ (先祖を照らすような人になれ)

「グワンスヒカラシヨ」は出産、誕生を個人のものとして捉えるのではなく、共同体、子々孫々の繁栄を意味していたのであろう。1人の人間が生を受けるということは、一族全体の喜びであった。

15には、「ウトゥスイ (お年寄り)」、「ナシングァ (子ども)」、「ウマガ (孫)」と3代を読み込んでいる。命の継承者としての子どもの役割を再確認させられる。

4 まとめと今後の課題

命は、あの世とこの世をつなぐ母親の暗い子宮や産道をとおって、湧き出たものである。生まれ出た命は母親と共に頑張っているこの世の明かりを拝んだ。人々は赤ん坊を玉黄金に例え、かけがえない愛しい子として称えた。また、子どもの出産は、共同体、一族の誉れを高めることでもあった。「湧き出た命」この表現は、命や自然に対する畏怖の念ととらえ、伝えて行くべき「念 (おも) い」なのではないかと思う。

妊娠は、精子と卵子の結合という科学的事実を否定する者はいない。しかし、それで全てが説明できるとも思えない。我々は自分の生まれたその時のことを経験として語れないのである。

本稿は、出産祝いの歌の読みと解釈を主とした。生命観については、これまで明らかにされてきた産育習俗や人生儀礼も含めて、検討していく必要がある。

命の尊さを伝えることは、先人が残したものの中に、たくさん眠っているのではないかと考えている。

最後に、筆者は方言の研究者でもなく、ましてやウタに特別詳しいわけでもない。ただ、沖縄に生まれ育った者として、文化の中核をなす言語を否定され、口承を寸断した世代として、次世代に伝えるべき事を模索している段階である。多くの方々のご助言、ご指導をいただきたいと考えている。

引用文献

- 1) 沖縄県教育委員会文化課、1974、『沖縄の民俗資料第1集』根元書房
- 2) 外間守善・比嘉実・中程昌徳監修、1980、『南島歌謡大成Ⅱ 沖縄編下』角川書店
- 3) 恩賜財団母子愛育会編、1975、『日本産育習俗資料集成』第一法規出版
- 4) 沖縄県教育委員会、1973、『沖縄県史23 民俗2』
- 5) 琉球大学民俗研究クラブ、1960～1976、『沖縄民俗』
- 6) 『沖縄大百科事典』、1983、沖縄タイムス社
- 7) 名嘉真宣勝、2000、『沖縄の墓と別れ遊び』『風俗史学』日本風俗史学会。
- 8) 金城実、1996、『知っていますか沖縄 一問一答』開放出版社 PP. 4～6
- 9) 大城立裕、1975、『沖縄文化の原点』、『沖縄資料集成』、green-Life、P. 20
- 10) 徳川宗賢、1972、『沖縄の親族語彙』『沖縄論叢 第5巻言語編』平凡社 PP. 472～490
- 11) 赤嶺政信、1998、『シマの見る夢』ポーターインク社 P. 63

参考文献

- 1) 比嘉春潮、1971、『琉歌概説』『沖縄文化論叢 第4巻文学・芸能編』；外間守善編 平凡社
- 2) 柳田国男監修、民俗学研究所編、1951、『民俗学辞典』東京堂出版
- 3) 新谷尚紀編、1999、『民俗学がわかる辞典』日本実業出版社
- 4) 西岡敏・仲原穰、2000、『沖縄語の入門』白水社
- 5) 福田アジオ・宮田登編、1983、『日本民俗学概論』吉川弘文館
- 6) 仲宗根幸市、1998、『しまうたを追いかけて』ポーターインク社
- 7) 渡邊欣雄、1993、『世界の中の沖縄文化』沖縄タイムス社
- 8) 半田一郎編、1999、『琉球語辞典』、大学書林